

Exhibit L

乙第 13 号証 1

ISBN4-8061-0711-5

C0034 P1300E



9784806107118



1910034013008

定価1300円(本体1262円)



田谷 卓 ウルトマンを語る

田谷 卓 談
鍋田 紘亮 構成

中経出版
0711-130

139

田谷 卓 ウルトマン を語る

田谷 卓 談
鍋田 紘亮 構成



〔著者紹介〕

〈談〉

円谷 皐 (つぶらや のぼる)

円谷プロダクション取締役社長。昭和10年、東京生まれ。玉川学園中等部・高等部、成城大学文学部卒業。フジテレビに入社。ディレクター、プロデューサーとして数多くの作品を手がける。43年、フジテレビ退社後、円谷プロダクションに入社。ゴジラやウルトラマンを創り「特撮の天才」と言われた父・円谷英二氏のあとを継ぎ、ウルトラマンを大きく育て上げ、現在にいたる。ラジオのパーソナリティー・作詞家・作曲家・歌手などという一面ももち、多才の持ち主としても知られる。

〈構成〉

鍋田 紘亮 (なべた こうすけ)

経済ジャーナリスト。1942年、福岡県生まれ。早稲田大学法学部卒。マネジメント誌の雑誌編集長、出版部長を経験。著書には『住友RM軍団の秘密』(KKベストセラーズ)などがある。

日本音楽著作権協会(出)許諾第9363075-301号

円谷皐 ウルトラマンを語る 〈検印省略〉

1993年12月9日 第1刷発行

談 円谷 皐 構成 鍋田 紘亮

発行者 杉本 惇

発行所 瞬中経出版

〒102

東京都千代田区麹町3の2 相互麹町第一ビル

電 話 03(3264)2771 (営業代表)

03(3262)2124 (編集代表)

FAX 03(3262)6855 振替 東京1-86836

乱丁本・落丁本はお取替えます。

本文写植版下・フォレスト 印刷・恵友社

製本・養正社

©1993 Noboru Tuburaya Kousuke Nabeta,

Printed in Japan.

ISBN4-8061-0711-5 C0034

2/3 第13巻



**Noboru Tsuburaya The Story of
Ultraman**

Noboru Tsuburaya = Narrator
Kousuke Nabeta = Formatting

Chuukei Publishing
0711-130



Chuukei Publishing



ISBN4-8061-0711-5

C0034 P1300E



List Price ¥1300 (Actual Book ¥1262)



Chuukei Publishing

**Noboru Tsuburaya
The Story of
Ultraman**

UMC0009216

[Introduction to the Authors]

<Narrator>

Noboru Tsuburaya (Noboru Tsuburaya)

Director and President of Tsuburaya Production, Born in 1935 (Showa 10) in Tokyo. Graduated from Tamagawa Academy Middle School and High School and Seijo University, Department of Literature. Joined Fuji Television. Served as director and producer for many works. Joined Tsuburaya Production at 43 after leaving Fuji Television. Succeeded his father, Mr. Eiji Tsuburaya, the creator of Godzilla and Ultraman, called a "genius of tokusatsu," and vastly grew Ultraman to its present state. Has aspects of a radio personality, lyricist, composer, vocalist, and so on, and is known as the holder of many talents.

<Formatting>

Kousuke Nabeta (Kousuke Nabeta)

Economics journalist. Born in 1942 in Fukuoka Prefecture. Graduated from Waseda University Department of Law. Experienced as Senior Magazine Editor for management magazine and head of publishing department. Has authored "The Secret of the Sumitomo RM Corps" (KK Bestseller) and so on.

Japanese Society for the Rights of Authors, Composers and Publishers (Issued) License No. 9363075-301

Noboru Tsuburaya Telling Ultraman <Official Seal Omitted>

First Edition December 9, 1993

Narrator	Noboru Tsuburaya	Formatting	Kousuke Nabeta
Publisher	Jun Sugimoto		

Published at Chuukei Publishing (Co., Ltd.)

P.O. 102

Mutual Kojimachi Building, No. 1, 3-2 Kojimachi, Chiyoda-ku, Tokyo

Phone 03(3264)2771 (Sales Representative)

03(3262)2124 (Editing Representative)

FAX 03(3262)6855 Money Transfer Tokyo I-86836

Books with out-of-order pages or missing pages may be exchanged.

Phototypesetting for this book done by: Forest Printing: Keiyu Printing Co., Ltd.

Binding: Yousseisha

©1993 Noboru Tsuburaya Kousuke Nabeta,

Printed in Japan.

ISBN4-8061-0711-5 C0034

UMC0009217

乙第 18 号証の3

第二部 決戦 122

ウルトラ学校、兄弟たちと遊んだ遊園地……という長巻に、子供たちの心の世界にフィットする物語展開が、その人気の最大の秘密なのかもしれない。

四十九年には、ウルトラシリーズ第六弾「ウルトラマンレオ」が制作される。SF熱血ドラマと銘打たれていたが、「ウルトラマンタロウ」に続いて、二つでもSF性よりホームドラマ性に力点が置かれた内容となっていた。

このシリーズの特徴の一つは、モロホシ・ダンとおおとり・ゲンとの師弟関係に力点が置かれたことだ。これに巨子や猛、トオルとカオルの兄妹といった存在が織りなすドラマが加わり、二つでもまた宇宙パトロール隊の活躍といったSF性が、やや抑えられたような描き方となった。

これではやはり、ファンの心を十分つかむことはむずかしい。その結果、シリーズ途中で視聴率は、ヒトケタ台にまで落ち込んでしまった。

このあと、番組強化策が次々に打ち出されていく。レオの弟・アストラと大手雷の伝説の超人・ウルトラマンキングの登場というの、その一つだ。四クールに入ると、恐怖の円盤怪獣シリーズもスタートしている。もっとも

むずかしいといわれている吊り（怪獣）による特撮処理などの工夫も、いろいろ果敢に行なわれたりした。

だが、変身チームにもかげりが出はじめてきて、視聴率は次第に下降線をたどっていくことになる。四十九年のオイルショックも、大きなマイナス影響をもたらした。不況風が吹くなか、やはり制作費のコストダウンが避けられず、それが金のかかる特撮場面の縮小となって現われ、アクション性は当然少なくなり、画面の迫力をそぐ結果をもたらすことになったのだ。こうして週一回金曜日のゴールデンタイムに放映された「ウルトラマンレオ」は、五一回を最後にシリーズを終了することになる。

※……………映像だけでなく、トータルパワーでの勝負

ウルトラマンは、ゼアン、エース、タロウ、レオ、ゾフィー、アストラ、そしてウルトラの父と母、さらにはウルトラマンキングというように、ウルトラマンはフ

第七巻 デアウォルメ記録で起死回生 123

乙第 13 号証の 4

第二部 戦闘 128

なりましたが、僕はアメリカでウルトラマンの映画を、どうしても成功させたいと思っていたから、安易に妥協できない。それで残念ながら、監督をやめてもらうことにしたんです。

はなはだつらい選択でしたけど、このようにウルトラマンのもっている従来からのイメージ、特に第一期ウルトラシリーズが築き上げてきた個性というものに変更を加えていくというのは、なかなか簡単なことではないんですね。

しかし、ウルトラ兄弟、ウルトラの父や母も加わり、総勢二〇人を数えようという今日の壮大なウルトラマン・ワールドへの発展は、ウルトラマンのファミリー化という戦略の路線選択がもたらした、明らかな成果にはかならない。

ウルトラマンが紡いだ夢を、いかに豊かなものにしていくか。それは映像だけではなく、怪獣ショー、マーチャントライジングなども複合的に考えた、田谷アロ総指揮者としてのトータルパワーのグレードにかかっている。そう

言い切ってもいいと思う。

※ 私財も売り、心身ともに疲れきっていた日々

「ウルトラフtright」から徐々に盛り返してきた第二次怪獣チームが、「ウルトラマンレオ」を最後にウルトラシリーズの放映に終止符が打たれると、途端に冷え込み、ふたたび怪獣はなれが進むことになった。そこはオイルショックが襲いかかり、向かってくる突風が田谷アロの経営を直撃した。映像制作が止まり、怪獣はなれによって怪獣ショーの依頼もなくなり、マーチャントライジングの足も引つ張られる結果となった。第二次チームのときは経常利益も一気にはね上がり、一時、企業としては小さな存在でしかない田谷アロが、世田谷区内で納税額第二位にランクされるほどの勢いだった。それだけに石油ショック後の落ち込みは激しく、あつという間に赤字を重ねる結果となっていく。田谷アロは、ふたたび冬の時代を迎えることになる。

いんてん 129 第七章 デフォールメ路線で起死回生

第一部 挑戦 130

毎月の給料も満定に支払えなくなれば、社員たちも辞めていかざるを得ない。毎月、一〇人、二〇人と去っていく。会社に明日はないと思えば、仕事に魅力を感じ、田舎の口は愛着を持っていた、社員たちは新天地を求めて生きていかざるを得ない。スタッフを含めて二〇〇人ちかくもいた社員は、いつの間にか、わずか正社員の五人になっていた。

当時、翠氏は藤沢市磯沼という一等地に四〇〇坪ものプール付きの自宅をもっていた。ドイツの某大手電機メーカーの日本支社長が以前使っていたもので、地下には六〇坪もの酒蔵、いわゆるウイナリーがあるという超豪華邸だった。三田にはまた、週刊誌が取材にくるほどの超高級マンションももっていたが、こういう不動産を所有したのは、いずれも三十五、六歳の頃だ。「年を取ってからいい家に住むのは当たり前であって、若いときに手に入れてこそ意味がある」――。

当時そういう考え方ももっていたので、すべて銀行からの借入金で三十代半ばで購入したものだった。

しかし、ゴルフ会員権なども含めて、こうした財産は借金の返済、社員のボーナスなどのために、いつさい処分せざるを得なかったのである。

借金は膨大で、財産を処分しても完済までにはとても手が届きませんでしたね。手形はいつさい出さない主義を貫徹していましたから、不渡りによる倒産ということとはなんとか避けられただけでも、その借金には何とも口には言い表わせないほどの重圧を感じていました。

そんなとき、ハワイでウルトラマンションをやりませんか、という声がかかったんです。一も二もなく引き受けて行ってみると、先方が用意してくれたホテルは、有名なホテル・シェラトンで、当時まだオープン直後で実に真新しかった。その高層ホテルの相当に高い階の一室が、僕に当てがわれた部屋だったんですが、そのベランダから下を見たとき、オレはここから飛び降りて死ぬんじゃないかと思ったんです。

死ねば借金から逃れられて、どんなに楽だろう。そういう死の誘惑にかられるん

第七巻 デフォルメ路線で起死回生 131

ですよ。それで、このままこの部屋にいたら、まぢがいなく死んでしまうと思ったものだから、何か理由をつけて別のホテル、それももっとも下の階の部屋に変更してもらった。それほど追い詰められていたんです。

ハワイでのショーは何とか無事やり終えて帰国しました。そのあとハワイの友人が、この人は日系二世の人ですが、日本にやっってきて、ある日、僕と会うことになった。彼と食事してレストランを出るとき、彼がどうしても自分に、その支払いはさせてくれと言って、ハワイからやっってきているお客なのに、僕におこつてくれたんです。こちらの苦しい状況を察してくれて、何も言わずに一馳走してくれたわけです。そのときの彼の優しさには涙が出るほどありがたかった。このときの恩義だけは忘れられず、彼が第一線をリタイアしたあとでも、「田谷ハワイ」の代表になつてもらうなどして、その恩の一端に報いてきている。

その後も苦しい日々が続き、夜も眠れないような状態でした。心身ともに疲れ切つて、トイレで尿が紅茶色に変色するほどだった。それでも、田谷アロを存続させ、どうしたら経営を安定させるかを、とにかく必死で考えました。

何といつても、いつもアームによって沸き上がり、アームとともに冷めていくという、ウルトラマンの人気の構造がもっとも大きな問題だった。その彼は、五年に一度のサイクルで回ってくる。五年に一度のアームというのは、子供の世代交替と深くかかわっているんですね。アームの大部分は男の子で、その男の子も年齢が長じるにしたがつて怪獣やウルトラマンから離れていくことになるので、ピークは一年くらいで、あとの三、四年は谷に向かつて下降していくようなかたちになる。そのあと、新しいアーム層の登場によって、ふたたび急速な人気回復が起こるというサイクルなんです。

テレビの視聴率が下がれば、ショーのオーダーもこなくなるし、商品の類もほとんど売れなくなってしまう。何とか、この悪循環を断たなければならない。そこで考えに考えを重ねて、僕が打ち出したのがウルトラマンのデフォルメ路線というものでした。

Defendant Exhibit No. 13 - 3

Ultra school, an amusement park where the brothers played... such story developments that fit into the internal world of children may have been the greatest secret to its popularity.

In the following year of 1974, the sixth Ultra Series, “Ultraman Leo” was produced. It described itself as a “hot-blooded SF drama,” but following in the shoes of “Ultraman Tarou,” the contents here as well placed the main emphasis on the home drama aspect rather than the SF aspect.

One characteristic of this series was that the main emphasis was placed on the master-disciple relationship between Dan Moroboshi and Gen Ohtori.

Drama spun from the existence of the brothers and sisters, Momoko and Takeshi, and Tooru and Kaoru was added, making a style that somewhat suppressed the SF aspect of the activity of the Space Patrol Squad.

This, of course, made it difficult to sufficiently grasp the hearts of the fans. As a result, the viewership levels partway through the series dropped to the single digits.

After this, program strengthening strategies were presented one after another. The appearance of Leo’s younger brother, Astra, and the legendary Ultra in the universe, Ultraman King were both one of these. In the sequels, “Terror of the Saucer Race Series” was also started. Devices such as handling special

effects using wiring (wire puppeteering), said to be the most difficult technique, were also valiantly carried out.

However, signs of decline were beginning to show in the transformation boom, and viewership levels gradually began to trace a falling line. The oil shock in 1974 also brought about a large negative effect. With the wind of recession blowing, the cutting of production costs could not be avoided; this manifested in the shrinkage of special effects scenes, which cost money; this naturally caused the action aspect to decrease as well, as a result bringing about the result of dampened impressiveness of the scenes. And so, “Ultraman Leo,” which was broadcast in the “golden time” weekly on Friday night, ended up finished the series with the 51st episode.

A Fight, Not Only on Film, But in Total Power

Just as the Ultramen were Seven, Ace, Tarou, Zoffy, Astra, and Ultra’s father and mother, as well as Ultraman King, Ultraman

Defendant Exhibit No. 13 - 4

but since I wanted to make an Ultraman movie succeed in America no matter what, this could not easily be compromised. So, unfortunately, I decided to remove him as director.

This was an extremely painful choice, but it's not a very easy thing to make changes to the image that Ultraman had had previously and particularly to the character that had been built up by the first Ultraman series.

However, developments toward today's massive Ultraman world, such as adding Ultra's father, mother, and others, numbering 20 strong, were nothing less than the clear result brought about by the strategic line decision of giving Ultraman a family.

How is it best to make the dreams spun by Ultraman rich ones? This rests on the grade of the total power of the Tsuburaya Production executive, not only through movies, but also looking collectively at monster shows, merchandising, and

the like. I think this can be confidently said.

**3Days of Selling Personal Assets, Being Worn
Out In Body and Mind**

When the airing of Ultra series was stamped as finished with "Ultraman Leo" as the last, the second monster boom that had gradually begun to grow back from "Ultra Fight" suddenly chilled, and people once again began to leave monsters behind. Then the oil shock struck, and the incoming squall struck Tsuburaya Production's management head on. Video production ceased, requests for monster shows disappeared with people leaving monsters behind, and as a result merchandising was pulled down with them. During the second boom, the current profits suddenly jumped, and for a time Tsuburaya Production, which had only had a small existence as a corporation, became so vigorous that it was ranked second in taxes paid in Setagaya-ku. For that reason alone, the depression after the oil shock was sharp, and in an instant the result was red numbers piling up. Tsuburaya Production once again entered a time of winter.

Once monthly salary could no longer be paid to their satisfaction, employees had no choice but to quit. Ten people, then twenty people left. It seemed that there was no tomorrow for the company; even if they were attracted to the job and had an attachment to Tsuburaya Production, the employees had no choice but to search for a new land and go on living. There had been nearly 200 people as employees including the staff, but before we knew it, only 5 full time employees were left.

At the time, Mr. Noboru had as his home a 400 tsubo (1324 square meters) home with a pool in the prime real estate area of Kugenuma, Fujisawa-shi. It was one that had been previously used by the president of the Japanese branch office of a large German electrical manufacturer, a super-luxury residence with a 60 tsubo (198.6 square meter) storage for wine, a so-called wine cellar in the basement. Sanda also had a super-high-class apartment such that weekly magazines would come for articles about it, but both had owned the real estate since they were 35 or 36 years old. "Of course you'll want to live in a nice house once you get older; there's good reason to obtain one while you're young."

At the time, that was the mentality that was had, so they were all purchased in their mid-thirties with money borrowed from the bank.

However, to repay debts, including employee bonuses and the like, there was no choice but to get rid of assets of this sort, including golf committee rights, etc.

The debts were vast, and even getting rid of assets, we couldn't even get close to completely paying them. Since we were carrying out a principle of never issuing a draft, we were somehow able to avoid bankruptcy due to a bouncing check, but we felt an indescribable amount of pressure from those debts.

At that time, we were reached out to about doing an Ultraman show in Hawaii. We accepted without question, and upon arriving, the hotel that they had arranged was the famous Hotel Sheraton, which at the time had just opened earlier and was absolutely brand new. The room, which was on a floor that was quite high up in this high-rise hotel, was a room that had been furnished for me, but when I looked down from the balcony, I thought, "What if I jumped down from here and killed myself?"

If I died, we would be able to escape the debts; how nice would that be? I was seized by the temptation to die. And so,

since I thought I would certainly kill myself if I stayed in that room, I came up with a reason and had them change me to a room on the very bottom floor in a different hotel. I was that driven into a corner.

We somehow finished doing the show in Hawaii without incident and returned to Japan. Afterwards, a friend from Hawaii, who was second-generation Japanese, came to Japan, and one day ended up meeting with me. I ate with him, and when we left the restaurant, he told me he really wanted to pay for it; even though he was my guest who had come from Hawaii, he paid for me. I was so grateful at his kindness at that time that tears came to my eyes. I will never be able to forget that debt; even after he retired from the front lines, I made him a representative of "Tsuburaya Hawaii" and rewarded him for a part of that debt.

Difficult days continued thereafter, and I was in a state such that I couldn't sleep at night. I was tired, body and soul, to the point that when I used the restroom my urine had changed to the color of black tea. Even still, Tsuburaya Production continued to exist, and I still thought with all my might how to stabilize the management.

No matter what was said, the biggest problem was the structure of Ultraman's popularity - we would always spring up with a boom, then chill with the boom. Those waves came on a cycle, once every five years. One boom every five years is deeply tied to the change in generations of children, right? The great majority of fans were boys, and as those boys grew in age, they left behind monsters and Ultraman; the peak was about 1 year, and afterwards at 3 or 4 years they were headed down into the valley. Afterwards, by the arrival of a new fan layer, a rapid recovery of interest would once again occur; it was this kind of cycle.

If the viewership levels decreased, orders for the show would stop coming, and types of products would, for the most part, stop selling. We had to somehow break this vicious cycle. So I thought and thought, and what I came up with was a deformed line for Ultraman.



January 4, 2017

Certification

Park IP Translations

TRANSLATOR'S DECLARATION:

I, **David Baldwin**, hereby declare:

That I possess advanced knowledge of Japanese and English languages. The attached Japanese into English translation has been translated by me and, to the best of my knowledge and belief, it is a true and accurate translation of the document with the bates numbers range: UMC0009216 - UMC0009221.

David Baldwin

Project Number: PWSP_1612_023

15 W. 37th Street 8th Floor
New York, NY 10018
212.581.8870
ParkIP.com